

源として部分的に活用して不都合な状況と交渉しつつも、けっして抵抗をあきらめず、批判者改革者として宗教教団内にとどまるメカニズムを解明していきたい(詳しくは、川橋範子「現代日本の仏教とジェンダー——フェミニスト仏教は開花するか?」末本文美士編『新アジア仏教史15 日本V』佼成出版社、二〇一一年を参照されたい)。

## アメリカの浄土真宗における女性たち

本 多 彩

アメリカでは仏教に関心を持つ人が多くなってきたといわれている。アメリカで最も古くから活動している教団が浄土真宗本願寺派である。現地での組織は北米開教区、Buddhist Churches of America (BCA) と呼ばれる。宗派は同じであっても、国が変われば人びとのジェンダーに対する意識も異なってくる。ここではアメリカの本願寺派における女性について考察する。

まず、BCAの中で現在唯一の全米組織を持つ仏教婦人会がある。この団体は、百年以上前に日本人移民女性によって仏教会(寺院)の教化団体として組織された。戦前は、仏教会の周縁にあるとみなされ、その活動が認知されることはなかったが、メンバー(門信徒)の細やかな変化にまで対応できるような組織を作りあげていった。第二次世界大戦後は、二世が戦前からの活動を継続しながらもそれらを柔軟に変化させ、安定的

な経済力をもって仏教会での存在感を高めていく。現在は二世から三世、そして異なるエスニックグループも包括している。彼女たちは「女性のみが入会可能な組織である」ことは政治的にはあやまり (politically incorrect) であることを自覚し、それをふまえて、さらなる会の発展を目指している。

アメリカでは多くの女性僧侶が活動している。男女がほぼ同数の組織もあるといわれている。BCAでは女性僧侶の数が大変少ない。その理由のひとつとして、人事異動を挙げることもできると思うが、まず僧籍をとるのに男女の区別がない宗派である。実際には僧籍を取りたい、もしくは作法や教義を勉強したいと思っている女性は大変多い。

十年ほど前に始まった Minister's Assistant Program は、メンバーから本格的に学びたいという声があがったことから始められた。これは、本願寺派の勤式作法や教えに関心を持つ人たちが、各仏教会そして開教区本部で研修を積むプログラムである。参加する人たちは、男女がほぼ同数である。僧籍を取りたいという人たちのためのプログラムも別に用意されている。こちらの参加者も男女の数が拮抗しており、実際の僧籍取得者は男女半々、そして多様なエスニックグループを見ることができる。また仏教会では十代後半から二十代の世代の不在が問題とされてきたが、こうした若者のなかからもより深く学びたいという人たちが出てきたことから、Youth Minister's Assistant が結成された。例えば今年は、参加者のおよそ三分の二が女性である。

アメリカで活動する宗教団体はすべからずジェンダーに向き

合うことが必要とされている。例えば移民や二世の女性たちと、現在の仏教会のメンバーとはジェンダーの意識がかなり異なっている。BCAをひとつのケースとして仏教婦人会の歴史的経緯と、そしてさまざまな最近の動きをみてきたが、アメリカの仏教界では僧侶や教団や組織ではなく、メンバーが自発的に、彼ら彼女らのジェンダー意識に則した形で変化が起きている。仏教会が世襲制ではないことや、アメリカならではのメンバーと仏教会の関係性などをふまえて、内部から少しずつ変わっていく姿がみられる。

### 聖公会における司祭職の再検討

——女性の司祭叙任をめぐる——

香山洋人

一九八〇年台後半から顕在化した日本聖公会における女性の司祭叙任実現を求める運動は、「ジェンダー平等」を中心とした教会改革運動だった。教会内の女性差別事象を機に女性信徒たちが運動の主体となり、総会、総会立の委員会へとその運動は展開した。一方この時期、教会全体として戦争責任やマイノリティー差別の自覚、人権問題への取り組みなどを通じた自己改革への道をたどっていた。女性の司祭叙任は一九九八年に実現するが、この過程は、これらの流れが相互に影響を与えながら形成されたものであった。しかし女性が司祭となることが目標だったのではない。本来この運動が目標としたマイノリティー

ーと連帯する教会への自己改革のためには、女性の司祭叙任を阻んできた神学、男性司祭主義そのものが克服される必要がある。男性司祭主義は家父長主義的キリスト教の一形態だが、日本聖公会はそれを英米教会から受け継ぐことで日本古来の家父長主義を承認、キリスト教のそれとを合体させ、ジェンダー不平等の価値観を維持、再生産してきた。こうした体質に改革を迫り、差別を克服してマイノリティーの解放に向けた連帯を目指す教会への変革は、既存の教会理解、信仰そのものを問う運動でなければならなかった。しかし、運動にかかわった個人、特に男性たちにそうした自覚は不十分だった。英国教会では、女性の司祭叙任を議論する過程で男性による論文集が出されたが、その主題は性差別の悔い改めと償いだった。しかし日本では男性司祭や主教によるこうした発言はみられなかった。

男性司祭主義を克服した教会は、「パートナースhip教会論」を必要としている。これは「神の宣教の神学」「神の民の神学」に基づくものであり、この間、女性信徒の運動が実践してきたものでもある。司祭としての女性たちの経験は司祭職の再解釈をもたらした。独裁的な権力者ではなく有形無形の「マイノリティーコミュニケーション」の形成と被差別者の「エンパワメント」に奉仕する職務。自らの抑圧性と被抑圧性、差別性と被差別性の自覚に立つ司祭職。単一でマサスモ的権威ではなく重層的で多様なアイデンティティを自覚し、その「はざま」を生き抜く知恵と感性を備えた司祭職だ。初代教会、少なくともイエス運動は「マイノリティーコミュニケーション」として被差別者たちをエンパワーしてきたはずであり、イエス自身が弱さと破れにおい